秒速200m

楼榮　槐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
秒速２００ｍ

【Ｎコード】
Ｎ１１０６Ｔ

【作者名】
楼榮　槐

【あらすじ】
秒速１００ｍの続きである第二巻。冬に突然行われることになった合宿で、ある異変が起きる。柘榴・隼都・我心は一体どうする！？

冬×合宿

　季節はめっきり寒い冬。今年の冬はかなり寒いが、毎年雪が降らないこの土地にもついに雪は降ってくれるだろうか。
「ざっくん！！朝練行くでぇ」そう声をかけてきたのは同じみ小東（コヒガシ）隼都（ジュント）。関西弁で人に勝手にあだ名をつけるのが特徴。実際俺の名前は桐生柘榴（キリュウザクロ）なのだが。

「まだ準備終えてねーんだけど？」そう言いながらシューズを出して我先にグラウンドに走り出す。
「ちょ……待てぇ。ざっくん！！」慌てて隼都も追いかけるが到底追いつく筈（はず）がない。何故って柘榴は

ショートランナーとして東部大会を優勝するほどの実力者だからだ。もちろん柘榴の方が先に着いたが、もう部員全員が集まっていた。隼都が着くと同時に顧問兼担任が話し始める。
「こんな季節であり得ない話なんだがー、合宿することに決まったー」生ぬるいようないちいち気が抜けるような話し方でも今回のビッグニュースには皆、驚きを隠せないでいた。
「せんせー！何でいきなり！？」
「何処に行くんですか？」
「いっすか！？」予想通りの質問の殺到に、顧問は面倒くさそうに対応する。
「行くところはなー山だ。寒いから気をつけろよー。日程は２６から２９日。クリスマスとか正月でうかれたい気持ちも分からないでもないが大概にしとけー。三泊四日なんだからみっちりしごかれて来いよー」他人ごとのように話す。
「私クリスマスのあとは従姉妹（いとこ）のところに泊まる予定だったのに…

…」
「部員全員で泊まる方が楽しいだろ」
「正月前は忙しくて大変です」
「そうか、お前の兄ちゃんに全て任せられる口実ができたな」
「宿題が……」
「合宿も一つの宿題だ」……とまあ、皆のブーイングの対応をする。
「何でこんな時期なんや……なぁざっくん？」そう言って柘榴の顔を見たが、柘榴は目を輝かせながら“合宿”という言葉を繰り返していた。
「そういえばざっくんはこーゆーの好きやったね……」一人ため息をつく。
「だって冬に合宿だぜ？」凄いだろうと言わんばかりなものだから適当に隼都もうなずいた。
「ってなわけで用事がある奴は早く俺のとこに報告来いよー」この話だけで朝練の時間は丸々潰れたのだった。

冬×合宿（後書き）

第二巻の御愛読ありがとうございます。とりあえず冬休みに合宿することに決まった柘榴と隼都。
これからどうなるのでしょうか？

転入生×陸上（前書き）

秒速１００ｍの続編のため、一部、それを読まなければ分からない表現が入ってます。

転入生×陸上

朝のチャイムが鳴り、皆席に着く。朝の会を始めなければいけない時間なのに担任がいない。5分後にようやく来た。
「遅れて悪いな」と言いながら、急いだ風もなくのんびりと教卓の前に立つ。
「と言っても、訳があってな」そして話すのを止め、皆の顔を見渡す。
「今日からこのクラスに仲間が一人増える。転入生、入ってこーい」
そう言われて入ってきたのは、誰もが惹かれる瞳、整った顔立ち、肩につくかつかないかの髪をした……紛れもなく我心(ガシン)、その人だったのである。

「我心！？」思わず声を上げてしまう柘榴(ザクロ)。驚きで危うく席から立ち上がるところだった。
「そういえば桐生(キリュウ)は試合とかで知ってんだな。ここにいんのは宮城(ミヤギ)我心(ガシン)だ。まぁ、仲良くしてやってくれや。ほら、突っ立ってないで自己紹介ー」
「宮城我心」その他何も言わない我心を見て、担任が呆れたような目を向ける。
「……それだけ？他にも言うことあるだろー。入りたい部活とか。別に実績言っちゃってもいいしー」ほらほらと我心をつつく。担任も嬉しいのだろう。陸上の有望選手が転入してくれて。
「はぁ。入りたい部活っていうか、入る部活は……野球部」
「ちょっと待ったー！！」さっきまでうなずいてた担任が声を裏返してツッコミを入れる。やっぱそうなるよなと、ため息をつく柘榴。
「お前陸上だろ！？　」普段声を上げない担任の様子に皆驚いた。
「中学の時も野球部だったけど。試合だけ出してもらってただけで」

相変わらず、教師へのため口は直っていない。
「は？」
「ちゃんと履歴書見た？」見ていないだろう。この面倒くさがりの教師にそんな真似ができるわけないだろうとクラス中の誰もが思った。
「とりあえずお前陸上見学な。桐生、コイツ連れてこいよ！」自分が墓穴を掘ったことをうやむやにするために、勝手に決められた我心と柘榴。は？という目を担任に向けるが相手は目を合わせる気も無いらしい。
「とりあえず窓際座れー」　こうして朝の会は終了した。

休み時間が終わったと同時に柘榴は我心のもとに駆け寄る。
「俺、お前が転入してくるなんて聞いてねーぞ」
「だってメアド知らないし」そういえばそうだったと柘榴が思い出す。柘榴は我心のメアドを知っているが、メールする理由もなかったため、ずっと教えていなかったのだ。
「ま、そんなことはどうでもいいけど何で転入したんだよ？」
「別に。異力無くしたから、周りを避ける必要もなくなったっしょ？流石に中学生なんだから、友達とかいた方が楽しそうだし。だからと言って、いきなり周りの人に態度変えると変に思われるから転入しただけのこと」この説明で柘榴も納得した。異力というのは人に触れると害を及ぼしてしまうというもの。そのために、我心は人と関わらないで生きてきた。しかし今はその必要もなくなったのだ、柘榴のおかげで。
「宮城（ジュント）っ！！元気だったかぁ？」そう言いながら飛び込んできたのは隼都だった。
「名前なんだっけ……？」
「隼都や！！小東隼都（コヒガシジュント）。なんや俺だけ覚えてたみたいでめっちゃ恥ずかしいやんけ」その言葉に苦笑いで返す二人。

「それより周り見てみいな」隼都が警戒するようなポーズをとる。皆の視線が柘榴たちに向けられていた。特に女子の視線が。
「やっぱカッコイイよ」
「イケメンって表すには勿体ないな。美形に違いないけど」
「それにしても桐生君と並ぶと絵になるよねぇ」
「いや……目付き怖くない？でも二人とも足速いらしいじゃん。そういう意味では格好いい」そんな会話をしている。もちろん小声で話しているため、柘榴たちには聞こえていない。
「見せ物にされてるみたいで悪い気分しかしねーな」
「こんなもんじゃない？だいたい転入生って噂されやすいし。良い意味か悪い意味か知らないけど」
「良い意味に決まってるやろ。女子皆釘付けやで。お前、友達作りきたんとちゃうの？男子に敵に回されへんように頑張り」意味が分からないという風に首を傾ける我心。
「そういえば我心の学校男子校だったんだよな」
「あの時は別の意味で敵に回されてた」
「違うだろ。回してたんだろ」
　そんな他愛ない話をしているうちに一時間目を知らせるチャイムが時をつげたーーー

転入生×陸上（後書き）

ついに柘榴の高校に、我心が転入してきました！！我心の通っていた中学校は私立の男子校という設定です。ちなみに一巻でも出た通り、柘榴の中学校は陸上で有名な公立中学校。これからどんな中学生活を歩んでいくのか…

あとがきまでお読みいただき、本当にありがとうございました。

陸上×連行

「てなわけで、お前陸上部決定な」
「は？」
部活見学１日目の我心に押し寄せる現実。
「ここの中学入ったんなら必然的に陸上だろー」
「だから入らないって……」
「とりあえずもう合宿登録メンバーに入れといたからな。ここの学校はスゲーぞー。なんたって県レベルしか来れないような合宿で、全員来れるんだからなー。ま、流石に地域ベスト１６はないといけねーが。お前はクリアしてるんだしな？」　そしてニヤニヤと笑う陸上顧問。我心の話には聞く耳を持たずというところだろう。
「その合宿行かなかったら？」
「そん時は、キャンセル料と俺への説明料金、俺への機嫌直し料金、俺の思考料……」
「それ、自分の都合代じゃん」
「見学だけでも行けばいいんじゃね？」そこに柘榴が通りかかってそう言った。
　やれやれとでも言うようにため息をついた我心はようやくその首を縦にふった。
「柘榴までそう言う？」
「じゃ、これ入部届けなー」顧問から差し出された入部届けを見てまたため息をつく。
「いえ、合宿の見学ってだけで入部はしませんから」そう言ったにも関わらず、顧問は
「考えとけよー」と去って行った。どうやらこの顧問の耳には入らないが考えとくに変換されるらしい。もともと入らないという選択肢は無いのだ。
「おい桐生ー。お前よくやったなー。宮城に合宿行かせるってだけ

でも相当な手柄だぞ」
「いや先生、我心は先生より頑固なんで合宿行かせたところで入部はしませんよ？っていうか先生に助け船出すために、我心に行くように勧めたわけじゃないっすよ？これではっきり諦めれば？って思いで言っただけだから、あまり自惚(うぬぼ)れんなよ」と、心で思っても声に出しては言わない。その代わりに、
「そんなつもりないっす。見学させるだけなんで」と、無難に答えた。

朝×眠る猫

プルルルル……携帯の着信音。朝っぱらから何の用？こっちはまだ寝てるっていうのに。人の気持ち考えて電話してよ。まぁ、出るしかないか……そう思いながらディスプレイの名前を確認する。思った通り、柘榴の二文字が青色に点滅している。常識はずれな友達に携帯番号なんて教えちゃいけない。

「もしもし？」

「もしもし……じゃねーよ！今何時だと思ってんだ！」

「９時。常識的に考えて、冬休みなんて１１時くらいまで寝てないと健康に悪いよ？朝っぱらから怒鳴るのもね」

「常識はずれはお前だよ！今日何日か分かってんのか！？」

「時間とかに左右される筋合いなんてな……」

「こら寝ぼけてるだろ」

「昨日クリスマスソングがずっと流れてて眠れなかったんだから勘弁して……」

「だから！！今日２６日だろ！？合宿のこと、お前忘れてんだろ！！！！」

「……あ」暫くの沈黙のあと、やっと目が覚めた。

「何時から？」

「もう集合してんだ！！早く学校来やがれ」

「……休んじゃだめ？」電話越しであっても美しい声ってよく言われる。って言っても電話なんて全く出ないけど。でもこう言ったら流石の柘榴も駄目だと言いづらくなるんじゃない？

「おい、宮城ー。もう遅刻なんだから早く来い。」顧問？いきなり話し手変えないでほしいんだけど。

「他の奴ら先行かせたから、ギリギリまで待つけど、俺も遅刻すんのは不味いから、あと２０分で来なかったら交通費お前が持てよー。じゃーな」は？２０分？交通費？っていうか一方的に電話切るなよ。

「ちょ……俺の家、結構遠いんだけど」休むとか休まないの問題じゃなくて、もとから行くのは強制？　これ行かないと、絶対あとで何かされるっしょ？面倒くさ。どう２０分で行かせる気だよ。

こうして陸上部の慌ただしい合宿は幕を開けた。

朝×眠る猫（後書き）

ついに中間テストが終わりました！
お待たせしてスミマセン；；；
これからの陸上部の合宿も頑張って書いていこうと思います（^O^）ゝ

合宿×試験

多少のトラブルの後、なんとか陸上部全員が合宿場に集まれた。
我心(ガシン)は結局、先生の車に乗っけてもらった。
「15分の遅刻だぞー。ま、俺はお前に陸上部に入ってもらうために、俺の点数を上げてもらおうと思っただけで、何のメリットも無しに待ってたわけじゃないからな」と、言いながら乗せた顧問に、笑いを噛み殺した柘榴(ザクロ)。お前ツンデレだったのかよ！本当に点数上げたいのなら言わなければいいものを。分かりやすい性格だぜと、柘榴でさえ思っていた。当の我心は笑うでもなく、呆れた顔で見返していたが。

まず合宿参加者がグラウンドに集合。周りは木で囲まれているというのに、驚くほどの広さ。
屋内プールやテニスコート、体育館など設備も充実。そのためか、合宿参加者も多かった。
「皆さんこんにちは。この合宿の……」と、1番偉そうな先生が話した後、設備の管理人やら何やらが話し、やっと合宿本体についての話が始まった。その頃には、我心だけでなく、隼都や柘榴も寝ていたために、慌てて先輩が起こす。
「まず始めに行(おこな)うことですが、今から一人一人タイムを測り、速さごとにチーム分けをします」いかにも体育会系の教師が淡々とした口調で話す。
「速い順にA、Bとグループに分けていって計二十三チームに分けます。参加者が四百八十七人なので一チーム大体二十人だと思っていて下さい。いわゆる試験です。
皆さん頑張って下さい。チーム替えは今日、明日、明後日の三回です。上を目指していって下さい」

そうして合宿の説明は終わった。燃える者や緊張している者、ハイテンションになってる者など反応はまちまちだったが、もちろん柘榴ははりきる側だった。
「絶対A行くぜ」
「ざっくん流石やなぁ。俺はどこいくんやろ？宮城は……て宮城は見学か。つい宮城見ると、ざっくんと走ってるイメージあるから忘れてまうわ」
「順応すれば？ってか見学って何すんのって感じ」
「そりゃあ決まってんだろ」柘榴がにやっと笑って顧問を指さす。
「アイツの奴隷☆」
「は？っていうか随分愉快そうだけど」
「さぁね～」嫌みったらしく隼都と顔を見合わせにやにや笑いを続ける柘榴。
「こうしてると柘榴と我心って似たもん同士やなぁ。と、いうより柘榴が我心に近づいてるんやないの？そんなニヤニヤ笑い、前はせぇへんかったのに」
「知るか。コイツにはなりたくねーよ」
「俺に似るとか百年早いから」互いに嫌味を言っている時点で、もう似ている……というのはあえて言わなかった。

練習×練習

試験は今日の夕方行われ、明日の朝に結果が発表される。だから今は仮のBグループ。まあ俺の実力ならAグループは行くだろ。ナルシスト要素入ってるように聞こえるかもしれないけどそれが現実。俺はAグループ以外行く気ないぜ？

相変わらず隼都はNグループで知らない奴にあだ名をつけて話してるし、我心は我心で荷物を運んだり顧問の手伝いをしたり意外とクルクル動き回っている。予想外だよな、ああゆうところ。でも実際、俺は我心のことなんて何にも知らないわけで。これから知るかどうかだって分かんないし、むしろ弱みとか見せない奴だろうなとか思ったりしている。それなのに俺の弱みばっかし見つけてくからズルいだろ？まぁそれはさておき、俺はといえば、色んなコーチとか顧問とかにみっちりしごかれている。

自分の学校の顧問の言うように事が進んでるのが少しむかつく。今は女のコーチがついているのだが、身長が低いところとか腕が華奢なところとかからは思いもよらない熱血系だった。名前は確か松浦（マツウラ）魅里（ミサト）だった気がする。珍しく俺が覚えてたのも、多分このコーチが自分の名前を凄い強調してたからだと思う。他のコーチはもっとうろ覚えだし、陸上しているとは思えないほど影の薄いコーチもいた。逆についてほしくないほど強烈なコーチもいたけれど。でも、松浦先生がつくことが多いからBグループの担当は松浦先生なのかもしれない。そこらへんは寝てて聞いてなかった。まぁ、そのうち分かることか。

「フットワークもう一回！！それぐらい時間内で終わらせないと、これから全国なんて行けないと思いなさい！！」松浦先生、メガホンも使わずに、よくそんな大声が出るよな。1日目に声がかれたりしたらシャレにもならねーぜ？

「樺戸！もっと足上げる！」樺戸といえば俺と前、準決勝とかで当

たらなかったっけ？俺もアドバイスもらえるかな？もっと速くなりたいし。

そうして待ちに待った夕方が訪れた。

練習×練習（後書き）

御愛読ありがとうございますＶ（＾－＾）Ｖ
今回の話は、厳しい練習ということで練習×練習という題にしました。新しく登場した松浦魅里。これからこの人物が大きく関わっていくことと思います。実際、柘榴の学校の顧問も名前出してないのですが＾－＾；
これからも面白い話が書けるようにがんばって行きたいと思います。

タイム×成功？

「位置についてー」この緊張感とスリル、誰にも譲れない。隣の奴の息づかいとか、応援とか、全てひっくるめてこの雰囲気が好きだ。
「用意ドン」

「ざっくん、どうやった？」夕食時、久しぶりに会ったような感じで隼都が柘榴に話しかけた。
「まずまずかな」最高タイムとまではいかなくても、このレーンではもちろんダントツだし、タイムも良かった。口に出して喜ぶとはせずとも、内心嬉しいのだろう。
「まぁ柘榴は心配せずともAグループだろうけどね」心ここにあらずといったように目が虚ろになっている我心。そうとう顧問の奴隷……いや手伝いが大変だったらしい。
「明日にならねーと分かんねーよ。それより我心大丈夫か？」
「喋る気力もない」これは重症だとでもいうように、柘榴と隼都は顔を見合わせた。
「普通に参加すればえかったんやないの？」
「やだ。そしたら確実に陸上部入んないといけないじゃん」
「そんな野球したいんか？」
「別に。野球だったら人数多いからサボったってばれないかな……みたいな」
「そんなんバレるわ！まず最初に髪型それでええのか？前の学校ではそれでえかったかもしれへんけど、この学校では坊主にせんとあかんやろ」肩につくかつかないかの綺麗なストレートを指でいじる。
「陸上部もやりたいっていえばやりたいけどね」
「は？どういう意味なん？」
「馬鹿。気づけよ隼都。サボる、サボれないで部活決めるような奴

じゃねーよ我心は。我心も我心で本当の理由言っちまえよ……一度俺に勝った以上、またやったら目、つけられるとか心配してんだろ？異力がなくなったことによるブランクが気づかれるって」そうか！と隼都が納得する。それを見て、我心は大きなため息をついた。

「そんなはっきり言わなくても……」

「本当は陸上も野球もやりたいって顔に書いてあんだろ」

「ホンマや。気づかんてアホやな俺も」隼都が自分の頭を小突く。それを見ながら、柘榴は苦笑いのような困ったような曖昧な表情を浮かべて我心の肩に手を置いた。

「……別にそんな心配しなくてもいいんじゃね？お前最近我慢ばっかじゃん。今までの経験上、失敗とかしたことないからこそ普通の人より心配が大きいかもだけど」

「そういうあんたが俺の心配してるじゃん」差し出された水を飲む。

「ざっくんは昔から心配しょうなんで～」らしくない柘榴の調子を取り戻したいのか、隼都は持ち前のおどけを披露。

「昔って1年前会ったばかりだけど？」予想通り突っ込んでくれた柘榴を嬉しそうに見る隼都。それから3人で他愛ない話に爆笑しながら1日目の合宿の夜は更けていった。

結果×試験

翌朝、グラウンドの中央と宿場の前の掲示板にでかでかと結果が張り出された。しかし、それを見る人は少ない。何故かというと、選手がそれを見るために殺到するだろうことを見越した主催者側が、事前に各学校ごとの生徒のグループを調べ、その結果をコーチや顧問に伝えてあるからだ。だから選手は、そこへ行けば教えてもらえる。だが、柘榴や隼都は顧問を探すよりも掲示板を見に行くことを選んだ。柘榴や隼都の名前の場所は大抵簡単に見つけられるし、柘榴たちの常識はずれな顧問が何処にいるかなんて知るよしもないからだ。

「ざっくん、俺小東のKやったで。覚えやすいやろ。なぁ、十二チーム目てどう思う？なぁなぁ聞いてるん？」いきなり走ってきた隼都がやかましい。声が高い方だから余計うるさく感じる。俺はまだ探してさえいないってのに。５００人近くいると、一番端のAの掲示板見に行くだけでも大変だっつの。

「ちょっと静かにしてろって。今探してんだから」

「探さんかてええやろ、どうせAや」

「そういうわけにもいかな……」ない。俺の名前がAグループにのってない。

「嘘だろ……」

「ん？なんやて？」Aをもう一度見直す。

「あった」

「ちょ……どこ向いてるん？」

「B」

「はぁ？」

「見ろよ」自分の名前を指し示してみせた。グループ内ではあいう

えお順に名前がのっているため、順位はのってないけど、明らかにB。俺がそんな……あり得ない！！

「嘘やぁ！この合宿どんだけレベル高いねん！！」

「桐生」いつからそこにいたのか、声をかけてきたのは意外にも顧問だった。

「次、頑張れや」そう言って肩を軽く叩く。そんな素振りが好きだった。厳しく怒鳴ることも、必要以上に同情することもいらない。後ろのことばっかに囚われる奴より前を見つめることのできる奴に教わりたい。この学校の陸上部が凄いのだって、面倒くさがっていても結局は生徒の心を読めるこの顧問のおかげかもしれないな。

「桐生はAにいける。お前のベストはまだ出せちゃいねー。最初はこんくらいの方がやる気出せんだろー。そう思ってやれや」にやりと笑って見せる。流石分かってるな。

「当たり前じゃないっすか」

「おう！その意気だ。だが一つ疑問に思ったことがあってなー」

「何っすか？」

「それがだなーAグループの大半の生徒に共通点があってよー。同じコーチに教わってるってことなんだが。まぁ学校の部活じゃなくて外部コーチなもんだから、生徒の学校はバラバラだがな。ところがどっこい今の今まで名前さえ聞いたことねーコーチだったんだ」

しらーっとした目で隼都が顧問の顔を見る。

「それただ先生が話聞いてないだけやないですか？先生周りのニュースとかに疎(うと)いところあるし」

「いやまじだって。桐生だって知らないハズだ。ま、練習とか目ぇつけとけよ。ほら、朝練始まるぞー。さっさと行けー」

確かに。俺が知らないコーチなんてそうそういない。名前聞きそびれたけど、そのコーチだってどっかで見てるはずだ。Aグループの動きは見本にもなるし、見ないわけにもいかない。

「ざっくん。早(はよ)う行かんと」

「ああ」絶対Aグループになってやる。俺はそう心に誓った。

結果×試験（後書き）

お久しぶりです。しばらく期末テストのために書けない状況にありました。今回の話では予想外の柘榴の試験結果と、顧問との掛け合いがメインですね。ちなみに顧問は国語の教師をしています。面倒くさがりですが読書量が凄いので、人の心理を読み取ることが上手い……という設定です。長くなりましたが、後書きまで読んで下さりありがとうございます。

これから柘榴たちの合宿はどうなるのか！？

それではまた次話でお会いしましょう。

現実×A

「半日も練習すれば分かる。奴らBグループなんざ見ちゃいない。なぁ柘榴」俺の隣の奴が遠くのAを見ながら文句を言う。我心とは真逆の顔立ちで、日に焼けた異国風の肌をしている。目も奥に深い感じで髪も短い。確か樺戸とかいう名字だった気がする。決勝戦にいつもいるから何となく覚えていた。ちなみに奴というのは、今Aグループにこれでもかというほどアドバイスを与えている指導者のこと。今は自由練習のため、一グループに一人ずつついているわけではなく散らばってアドバイスを送っている。樺戸はその指導者がAグループに集まりすぎていると言いたいのだろう。

「そうか？」そうとも思えない……いや、そう思いたくないだけか。

本当は俺だってあの集団の中にいたはずなんだ。

「お前明るいな！てっきり俺は落ち込んでると思ったのに。なんたって桐生柘榴（キリユウザクロ）といえば英雄だもんな」そう思うならその言葉を使わないで欲しい。だからと言って、俺だって落ち込んでるなんて堂々と言えないけど。

「お前は？」

「聞くなよ。それより聞いたか？四時からAと合同練習だってよ」初耳だ。でも、チャンスであることには違いない。AとBに何の差があるのかはっきり見せてもらおうか。

「今からA・Bの合同練習を始める。礼！！」A担当の指導者が号令をかける。合同練習だというにも関わらず一人しか指導者はいない。B担当の指導者も近くにいなかった。そのAの担当者も、雰囲気やその太った体型から陸上のコーチとはとても思えない。対してBの生徒はそんなことも気にせず、体操をもう一度してみたり、跳ねてみたりして今か今かと自分の出番を待っている。しかし、そう

して始まった合同練習が思わぬ結果を招こうと、Ｂの誰もが予想できなかった。

「嘘だろ……はっ」乱れた息、Ｂの誰もが目を疑った。ＡとＢの差。それは比べられるものではなかった。

「柘榴、お……前抜けると思っ……たろ……」樺戸が声を絞り出すように言う。Ａは未だに練習しているし、指導者も絶え間なく悪い点を指摘している。Ｂで立っているのは柘榴と樺戸と数人の男子だけだった。

「よくＢもここまでついてこれた！！アドバイスすることは何もない！！これで合同練習を終わりとする！！」

「アドバイスすることは……何もないだと？」柘榴が拳をわなわなと震えさせて呟いた。

「そうだ！！ついてこれただけでも凄いと褒めている！！」

「どこがだよ！！褒められるもんじゃねーだろ！！現実見ろよ！！」樺戸も吠える。

「現実見るのはお前だ！！ＡとＢの差が明らかに分かるだろう」指導者は鬱陶しいとでも言っているような目を向けた。Ｂのために時間なんて使えないと言わんばかりの視線を。

「樺戸……」樺戸の近くで倒れている生徒が微かに声を上げた。

「一緒に練習できただけでも良かったと思おうよ……」その言葉に、樺戸は何か言い返そうとしたが、何を思ったのかクルリと来た道を戻っていった。倒れている生徒たちも徐々に立ち上がる。

「ほら、お前も戻れ」柘榴に向かって厳しく言い放つ指導者。　柘榴は何も言い返せないまま立ち去るしか術がなかった。自分ができないのが問題なのだ、指導者に何を言っても仕方がないという想いを残してー

現実×A（後書き）

お待たせしました。ついにAグループとBグループの差がはっきりしましたね。これからが本番ですね。ついに我心兄が出る……かも！？

ちなみに私は8月のはじめに合宿があります。陸上部とは全然関係ない部活ですが楽しんで行きたいです☆

我善×真実

我心は眠たい目を擦る。
「昨日よりも早く起こす必要あるわけ？」と文句を言いながら。隣では、立ちながら寝そうな我心を何度も起こす顧問の姿。
「俺、することないしもう一度寝てくる」
「あのなー俺も教師だから敬語くらい使えよなー。やること無いならジュース買ってくるとか気を利かせろよー。お釣りで好きなもん買ってきていいから」そう言って五百円玉を投げてよこす。それを苦もなく元野球部の我心は受け取った。
「コーヒーブラックでよろしく」
「あれ？あんた苦いの大丈夫だっけ？もしかして俺に苦いの苦手だって隠すための我慢ならしない方がいいよ」
「俺をなめんじゃないぞー。ゴーヤ丸かじりできるんだからなー」
「大口叩くのはその辺にしときなよ」そう言って我心はさっさと練習場の外の自販機に歩いて行った。
「大口じゃねーぞー」誰もいないプールの近くで虚しくその声が響いた。

スチール缶に入った飲み物をお手玉のようにもてあそぶ我心。もちろん中身は炭酸などではない。それをいいことに、器用にジャグリングをしていた。
突然、手元ばかり気にしていたために、前から歩いてきた人とぶつかった。
「元気？我心」突然聞き覚えのある声に呼び止められて振り向く。
「貴様……！！」そこに立っていたのは身長が二メートル近くある

青年だった。顔立ちは我心とは似ても似つかないが好青年というのは共通点である。
　我心が甘いマスクとたとえられるなら我善はむしろ格好良いという世間一般でいうイケメンに分類されるだろう。キャップというよりハットが似合う我心より長い髪に、サングラスをかけ、肩に白い狐を乗せているあたりが少し不気味であったため、周りに誰もいないか我心は慌てて確認した。
「貴様とは兄上に向かって失礼だよね」
「何のようだ」我心は警戒しているように睨み付けた。いつもの余裕は消え、言葉も乱雑になる。
「だーかーら！そんな態度とるなって。だってお前は悪魔の子だよ？真っ黒な心を持ったね。幸せになっちゃいけないんだ。いっそのこと生まれなければ良かったのに」幼い子にでも言い聞かせるように優しい声を出す。
「周りの大人も言ったろう、我心には悪を象徴した狐を、俺様には善を象徴した狐をと。俺様の名前でもある我善は俺が良い行いをするだろうと期待されたからだ。それに比べ我心、お前の本当の名は蛾侵じゃなかったっけ？蛾のようにふらふらと、間違ってこの世に侵入してしまいましたーっていう紛い物だよ」
「違う……」拳を握りしめた。
「え？何だってー？もしかして餓死に辛いで餓辛だっけ？」
「やめろ！」我心は百八十センチ以上高い位置にある我善の襟元を掴む。
「怖くないよ、今のお前じゃ。それとも前の異力をもう一度手にしてみる？」我善の含み笑いを見て、我心は退いた。
「あんな薬、いつだって打ち込んであげる。……とまあそんな話するために声かけたわけじゃないんだよねー。合宿楽しんでる？我心がプレーヤーとして参加してないのは残念だけど」
「楽しんでるわけない」
「だからプレーヤーになって欲しかったのになー。あの果物君、そ

うとう苦戦してるでしょ。見てて面白いよね」
「……まさか柘榴に何かしたのか！？」
「柘榴っていうんだ？まぁその果物君には何もしてないよ」
「じゃあ何を……っあ！」
「そうそう、俺様の得意なことは薬の調合。今Ａにいる大半の生徒についている同じコーチっていうのは俺様だよ。ちなみにＡの担当は金で雇った俺様の助手」
「ドーピング……か」
「そう。流石俺様の弟」
「褒めてもらう筋合いなんてない！さっさと治療薬をよこせ！」
「我心ー。せっかく面白くなってきたんだよ？」
「貴様いい加減に……」その瞬間我心の体が揺らめいた。
「なに……」
「まあ俺様としてはベタすぎるし美意識に欠けてると思うんだけど……さっきぶつかった瞬間に眠り薬爪につけてみたんだよね。我心の爪噛む癖は今も健在か。本当は高熱出すくらいが丁度いいかもしれないけどあまり大きいとバレるでしょ？」
「これ以上皆に手出しすんな……よ」
「半年前と真逆のこと言い出すようになったね。あの頃の我心の方が良い性格してたよ。まあ、手出ししようがしまいがお前はすぐには動けない。そこでしばらくおやすみなさい☆」そしていつの間にか消え去っていた。

試験×不安

「今回の試験は急遽チーム内によるものに変更されました」そう報告が入った時、Ｂの誰もが安心した。察していたのだ、これではＣグループにも抜かされかねないと。スポーツの中でも走るという行為は一番基本になるもの、だからこそ陸上にメンタルは重要である。それなのにも関わらず、Ａグループと圧倒的な差を見せられた今、Ｂの精神は氷河期を迎えていた。

二回目の試験の結果、Ｂの大半がタイムでＣに負けるという形になった。誰が決めたのか知らないが、チーム内入れ替えになったことで、柘榴を含むＢグループは全てＢでいられた。Ｃにとってはせっかくの下剋上の機会を失ってしまったことに変わりはないが、だからと言ってＢ全員喜んだわけでも無かった。最初安心していた者も、Ｃのタイムより遅かったと知ると、負けた以上、Ｂで練習するのはプライドが許せない、そう言う者も出たのだ。そのためＢでは二、三人帰ったという噂もあった。もちろん柘榴は帰ることはなかったが、今年入って一番悪い結果を出したことを悔やんだ。

そして誰もが不安を感じた。

これからの合宿をどう過ごすべきかと……。

試験×不安（後書き）

八月に入り、夏休み！　と思った私。ついに合宿です！
柘榴たちのような合宿にならなければいいけれど（笑）
リアルを体験してもっと小説に活用していきたいです。それではっ
☆

希望×涙

「もういたくねーよ、こんな場所」午前中の試験結果を悔やむ樺戸。俺もその言葉に静かに頷いた。

「柘榴も同じなのか？顔に全く出てねーぞ？」

「思ってる。こんなとこいて、ホントに為になってんのかって、自信失うだけじゃないかって」思いたくなくたって現実を見れば明らかだし、どこまでも差があるAグループに追い付きたいなんて気持ちもとうに消え失せた。これから始まる午後練習も、やる気が出ない。俺だけじゃなく他の奴らもだ。Bグループに倦怠感が漂う。

そんな中にBグループ担当の松浦が来た。

「何、この雰囲気は？練習する気あるの？」誰も何も答えない。やる気はあるとは言えないし、無いと言ったら松浦を怒らせるだけだろう。

「そこの赤いティーシャツの男子、練習始めるけど？」指されたのは、未だに地べたに座りこんでる樺戸だった。松浦の視線によって嫌々ながら立ち上がる。

「別に俺、やりたくないなんて言ってないじゃないっすか。今までこんな辛い練習したことなかったんだ。みんなも同じだろ？」頷くこともできない皆を見回す。

「先生もBの担当なんてやりたくないでしょ？どうせならKとか、真ん中らへんやりたいって。所詮俺らは一位をとることはできない扱いづらい二番目っすよ。伸びしろもなければ、もともとの才能も一番には程遠い」ちょっといいすぎだろ！？俺は樺戸に非難の目を向けた。

「それはB全体を否定してるって考えるべきなの？」

「そうとは言ってな……」

「アンタはだから甘えてるって言われんの！」松浦が突然怒声をと

ばした。自分に言われてるわけでもないのに強く心に響いた。Aじゃなくても良い、一番じゃなくても良い、そんなやる気のない心が欲していた言葉。

「今まで練習を途中でほっぽりだしてきた人なんて沢山見てきたよ。でもね、それよりも辛い練習に堪えてきた人の方が沢山いたよ！アタシたちコーチはこの仕事に人生かけてんの！顧問のように、教師って仕事をしているわけでもなく。だから、アタシたちはアンタたちを精一杯サポートするために生きてんの！それに生き甲斐を感じてんの！それを、アンタらプレーヤーはやりたくないなんて一言で済ませらるわけがない！」頬に伝わる涙を拭い、それでも叫ぶ。その俺たちに向けられた涙に俺も感動した。あの人は、他のAばかり見ている指導者とは違かった。Bだからと、負け組だからと、罵りはしなかった。ただ励ましたー

俺の勝手な想いに違いないが、この人だけは俺たちをしっかり見ている、そう心が訴えた。

彼女の目は決意に満ちていた。俺のような迷いのある目を跳ね返すように、陰の部分も照らす光のように、あの人の目は一心に前を見つめていた。

「這い上がれ！」彼女の言葉と共に、

「いつまでもセカンドなんて言わせない！」俺はいつの間にか声を出していた。

「俺たちが上に行くんだ！」

「負け組なんて目、されちゃたまんねーよ！」次々と沸き上がる声。いつの間にか皆が声に出して、奥底に秘めていた希望をさらけ出した。

「負けるもんかー！！」空に突き上げた拳に誓い叫ぶ俺たちを、Aや他のグループになんて笑わせねぇ。

希望×涙（後書き）

合宿行ってきました！山だったので電波は届かないし、霧で真っ白だし、凄かったです！！　でも凄く楽しい体験ができました（ー∀ー）　私の部活は男女一緒なのですが、部員ともっと仲良くなれたと思います。

流石に柘榴たちのように事件という事件は起きなかったですけど、体育館に虫がいっぱいいまして……羽が壊れててもめっちゃ頑張って歩いてる虫を女子で応援してたんです。そしたら、男子が間違って踏んじゃったんですね；；（不慮の事故なんで悪気はないのですが→しかも私の部活は優しい男子しかいないので）みんなであ〝あ〝あ〝！！！みたいな感じでした；；

とりあえず体育館は虫の死骸だらけ（笑）

合宿はホントに楽しいので、行く予定のある人は是非とも楽しんで下さい。私もまた来年を楽しみにしていますo（＾－＾）o

長文になってしまいましたが、ここまでお読みいただきありがとうございました。

計算外×陰

「何かな……あれぁ」我善が見つめる先にあるのは我善の計算外のことだった。
「Bグループの奴ら、全然懲りてないじゃん」歯ぎしりをしながらその様子を見つめる。Aに負けて気力を失っている筈だったものが、逆に力を増しているからだ。
「誰かな、俺様の計算を狂わせたのは」
「短い時間の中にどれだけ練習できるか考えな！」その時、女の声が甲高く響いた。我善はそれを凝視する。
「あの女か……」舌打ちをしながら眉を寄せる。

俺の計画に害を及ばす奴は潰してあげる。そういえば、我心もこの言葉が口癖だったっけ……今も言ってるのかな。いや、あんな甘っちょろい性格した今じゃ、その言葉を口にするだけでも億劫か。なぁ我心、頭の悪いお前なら、きっと俺様が自分の作った薬を試すためだけに、ドーピングをさせてると思うだろうね。俺様が試すなんて真似をすると思うか？俺様の作った薬は絶対だ。お前のような不要物とは違って、失敗なんてあり得ない。完璧なんだ！意味がわかるか？俺様は、自分の薬でトップをとらせる人形を作りたいんじゃない、お前を徹底的にどん底に突き落としたいんだ！！周りから次々と……じわじわと苦痛を味わい続け、最後には悲愴に満ちたお前の顔を拝んであげるよ。

計算外×陰（後書き）

今回は我善視線。めっちゃ腹黒い兄貴ですね（^__^;）　しかし私には兄がいないので憧れます（笑）

さて夏休みもあと少し！　学生の皆さん、宿題頑張りましょっ（^__^）v　終わってる人（いるのか！？ｗｗｗ）も残りの夏休み楽しんでっ（´∀｀）

それではまた★彡

歓喜×履歴

俺はその時最高の楽しみを感じていたー

最初は他人に指図されてやるなんてまっぴらごめんだった。小学校の、まだ陸上の道に這うような形で少しずつ歩んでいたときは、コーチにあれやこれや言われなかった。それが、ようやく二足歩行になったと思ったら、フォームが違うだとか、バランスを考えろだとか、走るたびに言われた。コーチの前では走りたくないと思うほどに。自分が今までそうだと思い信じきっていたものを塗り替えられるようだった。自分は自分の考えに従いたいのに、一番楽なフォームでやりたいのに、それを許してもらえない。自分のことなんだから勝手にさせてくれとも思っていた。そう思っていたからか、無意識のうちにコーチのアドバイスに従っていなかった。

ある時どうしても上手くいかないことが起きた。それをコーチは気付いたのか、俺にやり方を教えてくれた。その時は本当に分からなかったから、教えられたそのままを飲み込んだ。渇いた喉を潤した言葉（アドバイス）。俺に本当に必要だったのは自分のやり方に従うことじゃなくて、コーチの話を聞くことだと気づいた。アドバイスを待つだけだった俺はいつしか自分から質問しに行ってた。陸上の道を二足歩行しているなんて思ってたのはとんでもない錯覚。人に見てもらうからこそ、自分の走りが生きてくる。それに気づいた時でも二足歩行してたか定かじゃない。

でも、今は本当に最高だった。一人一人に適切なアドバイスをくれる教師の下で、俺はどん底の中でいきなり宝くじに大当たりしたような、ある日突然飛べるようになったような気分だった。いや、それより全然嬉しい。俺が求めていた練習が今ここにある。さっき指摘された部分も、気づかなかったけれど、重要なことだった。こ

れからどんどん速くなる気がする。次の試験では、絶対Ａグループになってやる。

しかし柘榴はこれからあるグループ分け試験の重要な点を忘れていた。Ａグループになれば指導者が変わることをー

歓喜×履歴（後書き）

久しぶりです！というくらいに投稿していなかったことすみませんでした。夏休みの宿題のラストスパート頑張り、また新学期色々あり、大変だったと言い訳させて下さい……。　楼榮槐は最近、部活の新人戦がありました！団体戦ですが、なんと県大会出場という結果☆柘榴の気分が味わえましたよ（｀∀´）ですが、もっと皆に貢献したいのも事実です；；

部活、勉強、小説の両立頑張りたいですｏ（＾－＾）ｏ

またお会いしましょう♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1106t/

秒速200m

2011年9月20日03時24分発行